

# 決別、あるいは始まり の一幕

暁 煌

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

まどろみの日常に訪れた転校生。

中立のコロニーでは珍しくもないコーディネーターの彼は、持ち前の穏やかさで友達  
を作っていく。

そんな平和の中、切り落とされた戦いの火蓋。

親愛と憎悪。

生存と殺戮の中、束の間の休息での一幕。

少年たちは友情を取るのか、それとも隔意となるか。

※コーディネーターのオリ主が出てきます。

※ナチュラルというか少年組をディスつてます。

※キラは出番なし。

※短いです。

※続きません。

目

決別、

あるいは始まりの一幕

次

# 決別、あるいは始まりの一幕

その日は一度にたくさんのことがあった。  
本当に、たくさんの事が。

少年たちにとつて、初めての戦争。

巻き込まれてしまつた戦争。

中立の筈のコロニーで当然始まつたソレは、軍人と民間人を区別する事無く、  
ナチュラルとコーディネーターを差別する事無く、  
大人と子供を選別する事無く、全てに等しく降りかかつた。  
為す術も無く、流されるままに流されて、

彼らは今、広大な宇宙を漂う、ちっぽけな艦に乗つている。

その艦——アーヴェンジエル——は、今回の戦争の原因とも言えたが、

彼らにはその艦に乗る以外に選択肢は無く、また選んでいられる様な状況でもなかつた。

長い様で短い戦闘が終わり、彼らには漸く休息の時が訪れた。

張り詰め続けていた緊張の糸が解れ、誰しも気が緩んでいた、そんな時。

アークエンジエルに“保護”された少年たちは食堂に集まり、ぐつたりした姿勢で体の力を抜き、今回の事件について其々ぼやいていた。

その中で、ふと紡がれた言葉。

「キラには『大変だった』、で済んじやうんだよな。」

カズイの何気ない言葉が、少年たちの口を閉ざす。

彼の顔に、羨望と嫉妬が見え隠れするのも仕方が無い。

何故なら彼はナチュラルで、キラはコーディネーターなのだから。

しかし彼らは、そんな事は承知の上でキラと友達になつた。友達になつた筈だ。だから、その嫌な沈黙を破る様に、少年の一人が口を開く。

「何が、言いたいんだよ？」

「別に……。」

サイの咎めるような問いかけに、カズイは顔を伏せて返答を避ける。元々、深い考えや言いたい事があつて紡いだ言葉ではない。

ただ、ふと漏れただけの言葉だつた。

しかし、その言葉を“何気ない”で済ませる気の無い者が一人居た。ナチュラルばかりのこの艦に、たつた“二人”的のコーディネーター。その内の一人が。

まさに運命の日である今日、たつた十数時間前にキラたちの学校転校してきた少年。彼らと友達になつたばかりのルシル・ラグナが。

彼は人見知りしない性格と穏やかな物腰で、すぐに彼らと仲良くなつた。何より、小さなコロニーでは数少ない同世代のコーディネーター同士という事で、キラとは会つてすぐ打ち解けた。

その彼が、今や美しい顔に皮肉気な表情を湛え、カズイを睨み付けていた。ゆっくりとイスから立ち上がり、彼は口を開いた。

「なら俺が言つてやるよ。

『流石コードイネーター。僕たちナチュラルとは違うね。』  
「な……っ!?」

今まで静かに温和に微笑んでいたルシルの口から、突然沸いて出た悪意に驚くサイたち。

中でもカズイは顔を青くする。

そんな周りの様子を眺めながら、ルシルは更に続ける。

「そして次に、こう言うんだろう？」

『あいつはきっと心の中で、僕たちをバカにしてるんだ！』

「そんなん……そんな事ない!!」

耐え切れず否定の叫び声を上げるカズイ。  
しかし、ルシルの口は閉ざされない。

「お次は

『人に造られたバケモノのくせに』か?』

「ルシル！ 言い過ぎだぞ!!」

サイが堪りかねたように制止の声を上げるが、やはりルシルの言葉は止まらない。

「そして、最後はこう言うんだろう？」

『蒼き清浄なる世界の為に!!』

「……つ!!」

その言葉にカズイは青い顔を真っ青にし、視線を床に這わせる。

他の者たちも程度の差こそあれ、視線を宙に巡らせて誰一人ルシルの瞳を見る事はない。

彼らの様子を無表情に見遣り、誰も何も言わないのを確認し、ルシルは出口へと歩を進める。

そして、扉をくぐる瞬間、ぽつりと一言漏らした。

「――何だよ。友達になれたと思つたのに……つ。」

その言葉は、今までの悪意に満ちた言葉より、確実に少年たちの心を震わせた。

それが恐怖なのか怒りなのか、羞恥なのか悲哀なのか、絶望なのか、はたまた希望なのか、それは彼ら自身にも解らない。

ただ、確かにその一言は彼らの心を響かせた。

この後、彼らがどう行動するかは、彼らの気質次第。

彼らが再びルシルに“友”と呼んで貰えるのか、それとも“敵”と呼ばれるのか、今はまだ判らない。

しかし、どうやら悪い未来にはならないようだ。

何故なら彼らは、考えるより先に行動していたのだから。

“友達”に謝るべく、後を追いかけるという行動を。